

# 広報なか NAKA

## 2022

7.25

No.226



### Contents

|             |   |
|-------------|---|
| 健診を受診しませんか？ | 2 |
| 那珂市の指定文化財   | 4 |
| おしらせコーナー    | 8 |



# 那珂市の 指定 文化財

令和4年3月に新たに指定された市指定文化財2件をご紹介します。

※その他の指定文化財については市ホームページをご覧ください。

歴史民俗資料館 ☎ 029 - 297 - 0080



有形文化財「歴史資料」

1

佐竹義昭奉納棟札

この素鷲神社所蔵の棟札(図1)は、佐竹氏が戦国大名化する基礎を作った佐竹義昭が、永禄3年(1559年)に瓜連の牛頭天王社(現素鷲神社)を再興した際に奉納したものです。

棟札とは、寺社や家屋を建造・修繕するときの記録として納められるものです。この棟札には、寺院や町衆がこぞつて金品などを寄付していることが記されており、瓜連が寺内町として発展した姿をうかがわれます。また、義昭は35歳の若さで亡くなったため、義昭時代の史料は数が少なく、この時代を研究する上で大変貴重な史料です。

図1の棟札の大きさは、縦101cm、横30cm、厚さ1cmで、表面中央に「當社牛頭天王再興大旦那源義昭地頭源大納言願主太郎兵衛大工志津六※カッコ内判衆明」とあります。これにより、大旦那(出資者)は、佐竹氏の当主佐竹義昭

●工事差配者(管理者)は、この地域を実際に治める地頭今宮大納言光義(常陸太田市天志良波神社の別当)  
●願主太郎兵衛は天王社の神官、西野兵衛太郎と思われる  
●大工は、隣村志津村の六※カッコ内判読不明

といったことが分かります。

裏面には「永禄三年庚申二月」「御遷宮」「番匠三百人」とあることから、大勢の大工たちによつて再興され、永禄3年(1560年)2月に御遷宮となったことが分かります。

義昭は、佐竹氏の内紛で100年続いた「山入りの乱」などが終焉した後、諸氏と対立する中、父義篤にならい積極的に神社の勢力も取り込む努力をしました。

この棟札に記された寺院や個人の名前から、素鷲神社の再興に瓜連地区の寺院勢力が支援していることが分かります。

常福寺、西福寺、佛眼寺、天祐寺、安禪寺、如来堂、今泉寺、不動院、光明寺など、いずれも佐竹氏が創建、再興した寺院です。次に永歳、賀玉、守珍、誓圓らがいますが、町衆といわれる商人や職人など富裕層であろうかと思われます。また、寺門、高橋、萩野谷、大曾根、



図1 佐竹義昭奉納棟札  
(表面・部分)

秋山などの姓を持つ多くの在地有力者が寄進しています。

これらによつて、中世の瓜連の地を考察すると次のようになります。

●南北朝の争乱により廃城となった瓜連城は、佐竹氏の支配下において西北方面の監視的役割を担いつつ城郭の修造を続けた

●城内の常福寺は、勅願所ともなつて勢力を維持し、佐竹氏は西福寺の再建を含めて新たな寺院を建立し地域の安定化を図った

●義昭の関心が瓜連地域にまで及んでいた(この棟札が発見されるまでは、佐竹義篤・義昭に関する史料は常陸太田市・常陸大宮市には見られていた)

●瓜連の地が東西南北に走る街道が交差する重要な地であることから宿場として栄え、また、町衆や有力富裕層が成長して牛頭天王社、常福寺、西福寺などを中心とした寺内町・門前町として発展していった

## 2 神仏習合関係資料 (一括14点)

瓜連の素戔神社の祭神はスサノオノミコトですが、かつては牛頭天王宮と称され、スサノオノミコト・牛頭天王・薬師如来を祀る神仏習合の神社でした。

今回指定された素戔神社所蔵の神仏習合関係資料は、中世以来の神仏習合信仰の実態と神仏分離の歴史を明らかにする資料がそろっているところに、大きな歴史的価値があります。



図2 三位一体の姿

### 関係資料について①

#### 神・仏・牛頭天王の三位一体

日本は本来神道の国でしたが、後から仏教が伝来して神仏習合の姿となりました。やがて仏教が次第に勢力を伸ばし、仏教が主で神道は従であるとの主従関係となり、神は仏（本地）が姿を変えた（垂迹）ものであるとの本地垂迹説が生まれました。その一例が、薬師如来が本地仏で、スサノオノミコトは垂迹したものであるとの考えです。それに疫病退散に大きな力を発揮する牛頭天王信仰が朝鮮半島から伝来し、「神仏の習合と牛頭天王信仰」が全国に広まっています。

その三位一体の姿（図2）が、素戔神社のように、一つの神社に揃って伝えられてきたのは、全国的に極めて珍しく大変貴重なものです。素戔神社に仏教の經典である「大般若経」が奉納されていたことも、神社で仏教が信仰されていたことを示す資料です。

### 関係資料について②

#### 水戸藩の神仏分離を示す神札版木

この神仏習合の姿を分離しようとしたのが、水戸藩第二代藩主徳川光圀であり、さらにそれを強力に進めたのが九代藩主徳川斉昭でした。

斉昭が、いつごろからその政策を始めたかを示す資料の一つが今回指定された神札版木（図3）です。これによって、牛頭天王宮がいつから神仏分離して素戔神社と改称されたかが明らかとなりました。すなわち、「牛頭天王宮」「天保六年（1835年）」とあり、「素戔神社」「天保八年（1837年）」と彫られた2枚の神札版木から、この瓜連の素戔神社は、天保8年には神仏分離がなされていたことを示すと考えられます。

これは、水戸藩の社寺改革が始まるのは天保11年ごろとされてきたこと、また全国ほとんどの神仏分離は慶応4年（1868年）3月に神祇官から「神仏判然令」が出されたことからとされ

てきましたが、それよりも以前に水戸藩主斉昭は全国に先駆けて神仏分離を行っていたことを示す貴重な資料といえます。

図3 神札版木2点（画像は反転）



### 神仏習合関係資料一覧

|                     |     |
|---------------------|-----|
| ① スサノオノミコト<br>素戔鳴命像 | 1 幅 |
| ② 素戔鳴命像版木           | 1 枚 |
| ③ 牛頭天王面             | 1 面 |
| ④ 牛頭天王坐像            | 1 軀 |
| ⑤ 牛頭天王坐像脚部          | 1 軀 |
| ⑥ 木造薬師如来立像          | 1 軀 |
| ⑦ 銅製薬師如来立像          | 1 軀 |
| ⑧ 社額<br>「祇園牛頭天王宮」   | 1 枚 |
| ⑨ 天王宮版木             | 1 枚 |
| ⑩ 牛頭天王宮版木           | 1 枚 |
| ⑪ 素戔神社版木            | 1 枚 |
| ⑫ 神道裁許状             | 4 枚 |
| ⑬ 社記<br>「瓜連天王神器記」   | 1 枚 |
| ⑭ 大般若経              | 1 巻 |

### 那珂市の文化財展



今回紹介した史料を含めた市の文化財を、歴史民俗資料館で7月30日（土）から9月4日（日）まで展示します。ぜひご覧ください。